

幼児における 他者のよくない意図の理解と道徳判断

鈴木 亜由美

(受付 2007 年 10 月 11 日)

問 題

「心の理論」(Theory of mind) についての一連の研究は、子どもが他者の心を理解するしくみやその発達のプロセスを明らかにしてきており、それらの研究から、子どもが他者の意図や信念を理解するのは 4 - 5 歳ごろである、ということではほぼ意見が一致している。ただし、子安 (2000) は、子どもが「心の理論」を獲得することには様々な利点がある一方で、これを獲得した人間は、同時に悪意や猜疑心を併せもつようになるという点で、「心の理論」は両刃の剣である、と述べている。しかしながら、子どもがいつから他者に対して悪意を抱くようになり、またいつから他者の悪意を理解できるようになるかというテーマは「心の理論」研究の枠組みではほとんど扱われておらず (子安, 2000)、さらには数多く行われている対人感情の研究においても、「嫌う」「憎む」「怨む」といった悪感情についての研究は極めて少ないという (高木, 2004)。しかしながら、現代の社会ではいじめや子どもをめぐる犯罪が多発しており、子どもが他者の悪意を理解ようになる発達プロセスを明らかにすることは意義深いことであると考えられる。

一方、子どもの道徳性の発達に関する一連の研究の中には、他者の悪意あるいは行為の故意性の理解に関連したものが数多くある。具体的には故意に他児を傷つけた行為者と過失により結果的に他児を傷つけてしまった行為者に対して、幼児の道徳判断がどのように異なるかを検討しているものである。例えば、Nelson (1980) は、3 - 4 歳児と 6 - 8 歳児を対象に、

意図と結果の組み合わせにより、以下のような 4 つの例話を提示し、行為者の善悪を 7 段階で判断をさせた。4 つの例話とは、①相手にキャッチしてもらおうとしてボールを投げ、実際に相手がキャッチする場面（意図と結果がともに中立）、②相手にキャッチしてもらおうとしてボールを投げるが、相手にぶつかってしまう（意図は中立、結果はネガティブ）、③相手にぶつけようとしてボールを投げるが、相手がキャッチしてしまう場面（意図はネガティブ、結果は中立）、④相手にぶつけようとしてボールを投げ、実際にぶつかる場面（意図と結果ともにネガティブ）であった。その結果は、3 - 4 歳児でも③④を①②よりも悪いと判断していた。さらに、同様の手続きを用いた Yuill (1984) でもほぼ同じ結果が得られており、3 歳児でさえも程度意図を考慮した道德判断ができることを示すものであった。ただし、これらの研究は意図理解そのものを検討したのではなく、3 歳児にも故意と過失の区別ができていることを前提に道德判断を行わせていた。しかしながら、故意と過失の区別自体が年少の幼児には難しい（鈴木、子安、安、2005）とも言われており、幼児が Nelson らの用いたストーリーをどのように理解していたか、詳細な検討が必要である。

Nelson らの研究では、ストーリーが意図、行動、結果を示す 3 枚の図版によって提示されていたが、その 1 枚目である主人公の意図（ボールをぶつけようとする、とってもらおうとする）を示す図版は、吹出しを用いて描かれていた。吹出し (Thought bubbles) とは、本来漫画などで、登場人物の発話を表示するため、話者の口から吹出したようにせりふを描いたものであるが、そこから派生して登場人物の頭から泡のような囲みを描いて、「思ったこと」を表示するのにも用いられる（高嵩、2002）。近年では、他者の心的状態を理解することに困難が見られる自閉症児に対して、吹出しを伴う図版を用いて、他者信念の理解を訓練することで、それらの理解が向上するということがわかっている（Wellman, Baron-Cohen, Caswell, Gomez, Swettenham, Toye, & Lagattuta, 2002）。

それでは、子どもはいつごろ吹出しに描かれた内容を他者の心的表象と

して理解できるのであろうか。吹出しの理解を問う実験方法として、登場人物の頭から出た吹出しの中にある対象物を描いた図版を提示し、「登場人物はなにを考えているか」を問う研究が行われている。その結果、吹出しを登場人物の心的表象として理解できるようになる年齢には現在のところ2つの異なる説がある。Wellman, Hollander, & Schult (1996) は、「吹出しは他者の思っていることを示すものである」と教示されさえすれば、3歳児でも理解可能であると示したのに対し、高嵩 (2002) は吹出しを心的表象として理解することは3、4歳児には困難であることを示している。この結果の違いは、対象児の応答の正答基準にあると考えられる。Wellmanら (1996) の研究では、吹出しの中に描かれた対象物の名称を答えれば正答とされたのに対し、高嵩 (2002) では「○○したい」、「○○がほしい」という願望を表すことばを伴ってはじめて正答とされていた。

Nelson (1980) の用いた図版では、吹出しの中身が単体の対象物ではなく、人物を含む複雑なものであり、年少の幼児がこの図版を正確に理解していた可能性は低いと考えられる。そこで本研究では、Nelson (1980)、Yuill (1984) と同様の手続きを用いて、幼児が吹出しを伴うこのようなストーリーをどのように理解しているかを調べることにした。

また、Nelson (1980)、Yuill (1984) より、3歳児でも登場人物のよくない意図を考慮した道徳判断ができることが示されていることから、年少の幼児は他者のよくない意図の理解そのものを顕在的に表現できなくても、潜在的な理解はできており、それを道徳判断に反映させることができる可能性がある。しかしながら意図理解と道徳判断はこれまで別の領域の研究として扱われており、これらの関連性はほとんど検討されていない。最近では心的状態そのものの理解と、その心的状態の価値や善悪の理解の関連性を扱う必要性も説かれているため (Chandler, Sokol, & Wainryb, 2000)、本研究では意図理解と道徳判断の関連性を探索的に検討することとする。

方 法

対象児 広島市内の私立幼稚園に在籍する 3 - 4 歳児 15 名 (平均 4 歳 1 ヶ月), 5 - 6 歳児 13 名 (平均 6 歳 0 ヶ月) であった。

材 料 Nelson (1984) をもとに, 意図 (Bad, Neutral) と結果 (Match, Mismatch) を組み合わせた 4 場面を設定した。4 場面の内容は Table 1 の通りである。場面を表す図版として, 意図, 行為, 結果をそれぞれ 1 枚ずつの図に示したものを用いた。なお, 意図は結果の図の縮小版を吹出しの中に描いた。用いた図版の例を Figure 1 に示す。道徳判断には, 「よい」を表す天使の図と, 「悪い」を表す悪魔の図を, それぞれ「少し」「まあまあ」「とても」を示す 3 つの大きさを順に並べた図版を用いた。

手続き 調査は幼稚園の 1 室で, 1 名ずつ個別に実施し, 対象児の入室から退室までの発話をすべて IC レコーダーで録音した。はじめに, 意図, 行為, 結果を示す 3 枚の図版を同時に提示し, 1 枚目の図版の吹出しは主人公のしたいこと, しようと思っていることを表すということを教示した。

1) 意図理解 3 枚の図版を見て, ストーリーの内容を話すように促した。

子どもが自発的に話し始めない場合には, 主人公は何をしようとしているのか (意図), 主人公は実際に何をしたのか (行為), その結果何が起こったのか (結果) を順に尋ねた。

2) 道徳判断 「主人公 (ボールを投げた行為者) はよい子か, 悪い子か, どちらでもないか」を尋ねた。「よい子」と答えた場合には, 「少しよい子」「まあまあよい子」「とてもよい子」を示す 3 つの大きさの天使を並べた図版を示し, 「どれぐらいよい子か」を選択させた。「悪い子」と答えた場合も同様であった。その結果対象児の回答は, 「とても悪い子」から「とてもよい子」までの 7 段階に分かれた。

Table 1 ストーリーの内容

意 図	結 果	ス ト ー リ ー
Neutral	Match	主人公が相手にとってもらおうとしてボールを投げ、実際に相手がとった。
Neutral	Mismatch	主人公が相手にとってもらおうとしてボールを投げたが、相手にぶつかってしまった。
Bad	Match	主人公が相手にぶつけようとしてボールを投げ、実際に相手にぶつかった。
Bad	Mismatch	主人公が相手にぶつけようとしてボールを投げたが、相手がとってしまった。

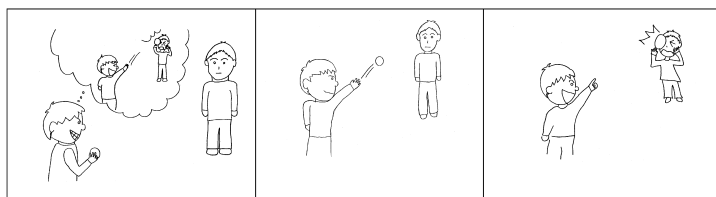


Figure 1 図版の例 (Bad-Match 条件)

結 果

1) 意図理解 ストーリーの説明を求めた際の幼児の発話のうち、図版1枚目に関する発話を分析対象とした。録音されたすべての発話データを文書に起こし、発話を次の3つのカテゴリに分類した。第1のカテゴリとして、吹出しの中身を、「○○しようとしている」「○○したい」というように、主人公の思考ととらえているもの、第2のカテゴリとして、「○○している」というように実際にその場面で起こった事実としてとらえているもの、第3のカテゴリとして、それらのどちらにも分類できないもの、あるいは無答を分類した。Table 2に3つのカテゴリの実際の発話例をあげた。

次に、意図 (Bad, Neutral) ごとの2場面中に、3つのカテゴリがどのように現れたかを年齢別に示したものが Figure 2 である。

カテゴリごとに、年齢 (3 - 4 歳児, 5 - 6 歳児) × 意図 (Bad, Neutral)

Table 2 各カテゴリの発話例

カテゴリ	発 話 例
思 考	「ボールを投げようとしている」、「ボールを投げたい」、「ぶつけない」(Bad), 「とってもらいたい」(Neutral)
事 実	「ボールを投げた」、「ぶつかった」(Bad), 「相手がとった」(Neutral)

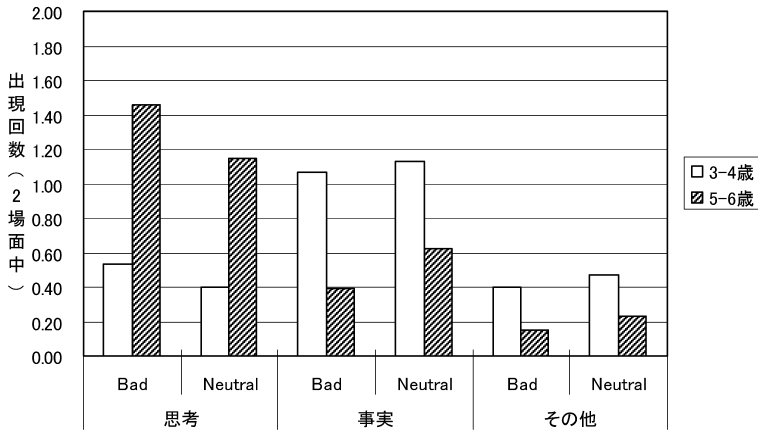


Figure 2 各カテゴリの平均出現回数

の 2 要因分散分析を行ったところ、「思考」で年齢の主効果が有意であり ($F(1, 26) = 11.14, p < .01$), 3-4 歳児よりも 5-6 歳児で多く見られたこと, また「事実」でも年齢の主効果が有意であり ($F(1, 26) = 4.98, p < .05$), 5-6 歳児よりも 3-4 歳児で多く見られたことがわかった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

2) 道徳判断 行為者の善悪についての対象児の反応を, 「とてもよい: +3」から「とても悪い: -3」までの 7 段階として, 年齢別に Figure 3 と Figure 4 に示した。

年齢 (3-4 歳児, 5-6 歳児) × 意図 (Bad, Neutral) × 結果 (Match,

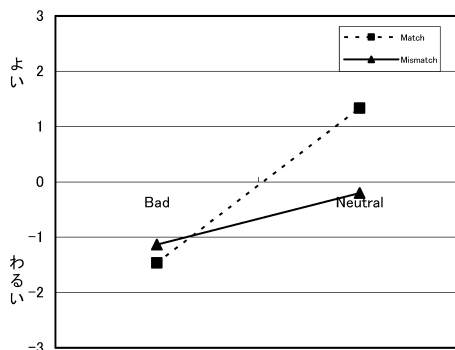


Figure 3 3 - 4 歳児の道徳判断の平均値

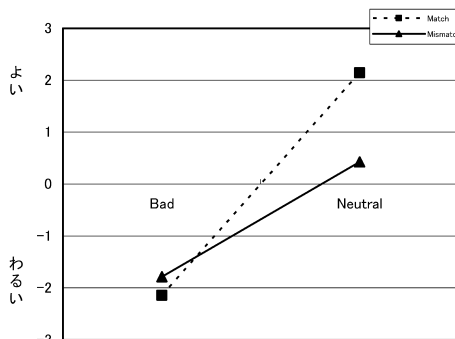


Figure 4 5 - 6 歳児の道徳判断の平均値

Mismatch) の 3 要因分散分析を行ったところ、意図の主効果が有意であり ($F(1, 26) = 42.80, p < .01$), Bad よりも Neutral の方が「よい」と判断されたことがわかった。また、意図と結果の交互作用が有意であり ($F(1, 26) = 7.92, p < .01$), 単純主効果の検定の結果、意図が Neutral のときには結果が Mismatch よりも Match がより「よい」と判断されるのに対し、意図が Bad のときには結果による差は見られないことがわかった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

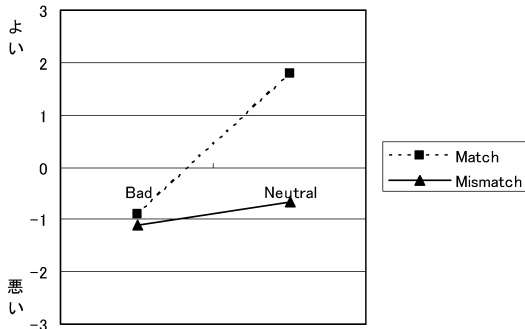


Figure 5 事実群の道徳判断の平均値

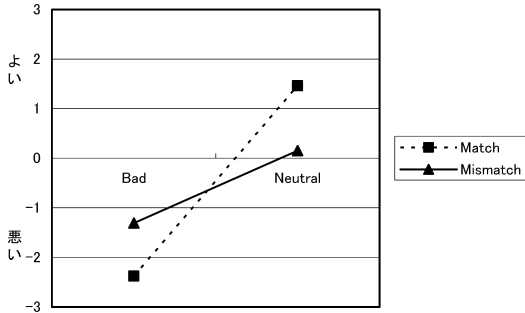


Figure 6 混合群の道徳判断の平均値

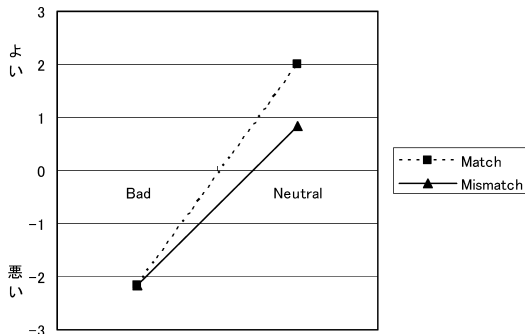


Figure 7 思考群の道徳判断の平均値

3) 意図理解と道徳判断の関連

意図理解の課題で、4場面全てにおいて吹出しの内容を「事実」ととらえた反応をした子どもを「事実群」、4場面全てにおいて吹出しの内容を登場人物の「思考」ととらえた反応をした子どもを「思考群」、場面によって「思考」と「事実」の両方が見られた子どもを「混合群」とした。「事実群」は4歳児8名、6歳児1名、の計9名、「混合群」は4歳児6名、6歳児7名、の計13名、「思考群」は4歳児1名、6歳児5名、の計6名であった。これらの3群別の道徳判断の平均値を Figure 5 - 7 に示した。

意図理解のレベルによって道徳判断に違いがあるかどうかを調べるために、意図理解（事実、混合、思考）×意図（Bad, Neutral）×結果（Match, Mismatch）の3要因分散分析を行ったところ、意図の主効果が有意であり（ $F(1.26) = 36.54, p < .01$ ）、Bad よりも Neutral の方が「よい」と判断されたことがわかった。また、意図と結果の交互作用が有意であり（ $F(1.26) = 6.39, p < .05$ ）、単純主効果の検定の結果、意図が Neutral のときには結果が Mismatch よりも Match がより「よい」と判断されるのに対し、意図が Bad のときには結果による差は見られないことがわかった。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

考 察

意図理解 3 - 4歳児の多くは、吹出しが他者の思ったことを表す旨教示されてもなお、「主人公は何をしたのか」という問いかけに対し、「ボールを投げた」「ぶつめた」という事実を答えており、吹出しの理解に関しては、Wellman ら（1996）、高嶋（2002）と比べても低い成績であった。この原因として、Wellman ら（1996）、高嶋（2002）の先行研究では、吹出しの中身が単体の物であったのに対し、本研究では吹出しの中身が、「ボールを投げて相手にぶつかる」というそれ自体因果関係を含むものであったため、より幼児にとって理解しにくかったからであると思われる。言い換えれば、Wellman ら（1996）、高嶋（2002）の先行研究は、「願望」を扱って

いたのに対し、本研究では「意図」を扱っていたのである。

「願望」と「意図」の区別について、Astington (1993) は、願望はいくつもの手段で満たされ得るが、意図は一つの手段でしか満たされない、と述べている。例えば、暑いので水に濡れたいという「願望」を有している場合、池に落ちてでもプールに飛び込んでも、その願望は満たされるが、プールに飛び込もうという「意図」を有しているときには、実際にプールに飛び込むことでしかその意図は満たされない。Astington (1993) は、この分類にもとづいた実験を行い、同じ願望を有している場合の意図的な結果と偶発的な結果の区別は 5 歳にならないと難しいことを示している。

本研究で扱ったのは、「ボールをぶつけよう」とする意図であったために、必然的に吹出しの中身も複雑なものになったと考えられる。例えば、「相手を悲しませたい、困らせたい」という願望を示すために、吹出しの中身として相手の子どもの泣き顔のみを描くなど、もっと単純にすれば 3 - 4 歳児にも理解可能であったかもしれない。

道徳判断 意図の主効果が有意であったことから、3 - 4 歳児であっても結果に関わらずよくない意図をもってされた行為を「悪い」と判断することがわかった。さらに意図が中立であるときには結果によって判断が左右されること、特に意図が中立であっても結果がよくないときには、道徳判断の平均値が 0 付近にあることから、意図的でなくてもよくない結果をもたらした行為者を、いいとも悪いとも判断しかねるという傾向にあることがわかった。これらの結果はいずれも先行研究 (Nelson (1980), Yuill (1984)) と一致している。幼児は 1 つでもネガティブな手がかりがあるときはそれに影響されてネガティブな判断をする傾向にあるようである。Yuill (1984) では、7 歳児になると、たとえ結果がネガティブなものであっても、意図的でなければ「よい」と判断するようになることがわかっており、年齢とともに意図のみにもとづいた道徳判断をするようになると考えられる。

意図理解と道徳判断の関連 意図理解による群分けの主効果は見られず、意図理解ができていてもいなくても、道徳判断には影響を及ぼさないこと

がわかった。Figure 5 より、吹出しの中身が主人公の意図を示すことを全く認識していなかった子どもでも、結果に関わらずよくない意図をもってされた行為を、より「悪い」と判断することがわかった。この結果から、他者の悪意そのものを理解するよりも、道徳判断の方が発達的に先立つという解釈が可能である。つまりある人物が意図的に他者を傷つけようと企んでいるということの顕在的な理解なくしても、その人物が悪い、という判断はできるということである。

この仮説は非常に興味深いものであるが、そのように結論づけるには本研究における次の3つの問題点を解決しなければならない。1点目に、本研究では意図理解の指標として吹出しを理解できるかということのみを用いたが、はたして吹出しの理解をそのまま意図理解ととらえることができるのか疑問が残る。さらには前述のように、本研究で用いた吹出しの内容が複雑過ぎたために、幼児の能力を過小評価した可能性も否定できない。

2点目に、本研究で用いた材料に関して、主人公の表情が条件によって統制されていなかったことが問題である。Figure 1 の通り、意図が Bad のときには主人公は明らかに意地悪そうな表情をしており、吹出しの理解ができていなくても主人公の表情だけを見て道徳判断ができた可能性がある。3点目に対象児の人数の問題がある。Figure 5 - 7 を見ると、グラフ上では意図理解があるほど意図にもとづく判断をしている傾向も見受けられる。9名、13名、6名と少なく人数も均等ではなかったが、対象者を増やせば有意差が出る可能性もある。

以上の問題点を解決した上で、もう一度前述した仮説を検証する必要があると考えられる。

文 献

- Astington, J. W. (1993). *The child's discovery of the mind*. Cambridge: Harvard University Press. 松村暢隆訳 (1995). 子供はどのように心を発見するか 心の理論の発達心理学 新陽社
- Chandler, M. J., Solk, B. W., & Wainryb, C. (2000). Beliefs about truth and beliefs

- about rightness. *Child Development*, **71**, 91–97.
- 子安増生 (2000). 心の理論 心を読む心の科学 岩波書店
- Nelson, S. A. (1980). Factors influencing young children's use of motives and outcomes as moral criteria. *Child Development*, **51**, 823–829.
- 高木邦子 (2004). 否定的対人感情研究の諸相 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **51**, 63–76.
- 高嶋眞知子 (2002). 幼児における吹出しによる表象理解の発達 発達心理学研究, **13**, 136–146.
- Wellman, H. M., Baron-Cohen, S., Caswell, R., Gomez, J. C., Swettenham, J., Toye, E., & Lagattya, K. (2002). Thought-bubbles help children with autism acquire an alternative to a theory of mind. *Autism*, **6**, 343–363.
- Wellman, H. M., Hollander, M., & Schult, C. A. (1996). Young children's thought bobbles and of thoughts. *Child Development*, **67**, 768–788.
- Yuill, N. (1984). Young children's coordination of motive and outcome in judgments of satisfaction and morality. *British Journal of Developmental Psychology*, **2**, 73–81.

Abstract

Young children's understandings of others' immoral intentions and moral judgments

SUZUKI Ayumi

This study investigates how understandings of others' intentions and moral judgments are related in young children. Fifteen 4-year-olds and thirteen 6-year-olds were presented four types of stories: intentional harm stories, accidental harm stories, attempted harm stories, and control stories. The character's intentions were depicted in thought-bubbles. Children were presented pictures that depicted each story, and they were asked to identify the type of story. In addition, they were asked to make the moral judgment of whether the character was good or bad. Their responses were converted to a 7 point scale, from very bad to very good. It was found that only the 6-year-olds understood the thought-bubbles as someone's thoughts and thus could correctly identify the stories. On the other hand, in the moral judgment, both 4-year-olds and 6-year-olds judged intentional harm and attempted harm as worse than behaviors in the other stories. Even children who could not correctly identify the stories at all could judge intentional harm as worse than behaviors in the control stories. The results suggest that 4-year-olds have implicit understandings of others' immoral intentions, and that 6-year-olds have explicit understanding of them.